

二〇〇九年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

第3問 古文 『一本菊』

〔通釈〕

兵衛佐が、申し上げたことには、「あの菊は父である右大臣殿が、鞍馬へ参詣なさった折に、鞍馬の僧坊の前栽〔庭の植え込み〕に、しんくはんもんが、父が亡くなった後、(私の) 妹でございませぬ者が、父の形見として見ようということで惜しんでそのままにしておきましたのを、(宮の) 御命令に従って差し上げたのでございます」と申し上げると、(宮は) 「(おまえの) 妹とは播磨の三位を母とする、帥の局か」とお尋ねになるので、(兵衛佐が) 「そうではございません。私と同じ式部卿宮の娘を母とする者でございませぬ」と申し上げると、宮が、お思いになったのは、「さて、現在の(殿上人の) 扱いは見てみたところ) で、(兵衛佐ほどの者は他に) 思い当たる者もないけれども、上皇(のもと) にもこの兵衛佐に並ぶ(ほど素晴らしい) 殿上人はいないのだから、まして、女であつてあの兵衛佐の妹であるならば、どれほど(容姿端麗で) 美しいことだろう。ああ、会いたいものだ」と、(宮は兵衛佐の妹君に) 深くお心を傾けて(いらっしゃるが)、この兵部卿宮は、今上天皇の御腹違いの弟君で、何事につけても情が深く、この兵衛佐にも、常々御目をおかけになつて大切にかわいがりなされていたのであつた。

(宮は) この姫君〔兵衛佐の妹君〕のことを、一晚中恋しく思つて夜を明かしなされて、宮の御隨身〔貴人の身近に仕える従者〕である、常磐と申して髪も容貌も十分に整つていて十四、五歳ぐらいで万事物慣れている少年をお呼びになつて、「あの菊の一枝を、折つて参れ」と御命令があつたので、(常磐は) 朝が白々と明ける頃の露がたくさん降りている庭に、(濡れないように) 指貫〔はかまの一種〕の裾をつまみ上げて(入り)、菊を手折つて(宮のもとへ) 参上した。宮は、(その菊と) 同じ色の菊重ねの薄紙に、このように、

わが心…私心があなたの(お宅の) 垣根のほうに傾いて行くのは今もなお残っているのですか、(御父上から受け継いだ) 白菊の花を。その色づいた白菊の花のように美しいであらうあなたに、私は心が傾いているのですよ。

菊に降りる白露(のような私の涙) はさらに降りまされて苦しいのになあ」とお書きになり、(先ほどの) 菊の枝に結んで、「兵衛佐の妹の住んでいるという所の、格子に挿して帰つて来い」と御命令があつたので、常磐は、もともとこの間の事情を、よく知っている者であつたので、三条高倉へ行き、この姫君の住んでいらつしやる西の対〔寝殿造りの邸の西の離れ〕の中格子に(手紙を結んだ菊を) 挿して帰つた。(すると、姫君に仕える) 女房たちが、御

格子を上げようと思って、立って出て来て、この花を取り、「これを御覧下さいませ。花に添えて、(並大抵でなく)すばらしい色合い(や香り)の薄紙に、歌が書かれておりますのを、御覧下さい」と言って、兵衛佐に、お見せ申し上げたところ、(兵衛佐は)御覧になって、「兵衛卿宮の御筆跡である。これはどうしたことか。(間違いなく)宮の御筆跡でいらつしやる。どのようにして(姫君に)好意をお持ちになるようになったのか。いうまでもなく、これこそ、理想的なことである。父母が生きていらつしやったら、今まで(姫君が)このよう「高貴な方との縁もないまま」でいらつしやることがあるうか。(本来であれば)今頃は、女御「皇后に次ぐ天皇の妻」、皇后「天皇の正妻」の位にもついでいらつしやるはずであるよ。この度(このように)宮からの)、御手紙があるならば、(姫君には)御返事を(するよう)にお勧めなさい。女房たちよ」とおっしゃった。(すると)再び昼頃に、宮が、常磐を御使者として、御手紙を下さる。(その手紙に書かれた歌はこうであった。)

行き通ふ…(かつて)人々がその関を(行き通つた)という跡は(実際には見たことがないので)知らないけれど、「逢ふ」を言い掛けることで知られる(逢坂の関を今こそ越えたい。あなたに会いたいです。)

「今回は、(おまえが先方に)姿を見せて御返事を求めよ」と御命令があったので、常磐は、(御命令を)お受けして、三条へ行き、西の対で、「これは兵部卿宮からの御手紙だぞ」と言うと、女房たちは、「なんと。思いも寄らない。人違いか。さつさとお帰り下さい」と言って、(宮の手紙を)取り入れない。(常磐はなすすべもなく)むなししく帰った。(そこで、宮は)繰り返してこのように(詠んだ)、

紅の…(紅色の末摘花が私であるのだろうか。踏み返される(末摘花の)花のように、文を返されるこの身がづらい。)

とお詠みになって(姫君へ)送りなされる。常磐が、(手紙を)受け取って(姫君の住む西の対へ)行き、様々に言うけれども、(姫君は)出て来ない。返事もしない。常磐が、幼心に(返事をしない姫君を)憎らしく感じて申すには、「ただいま、(こちらの女房たちは)我が君「兵部卿宮」の御手紙などを心外なものとして扱いなされるが、それはよくないことだぞ。せめて(宮の御手紙を)取り入れるだけでも取り入れて下さい」と言って、御簾を上げて(手紙を室内へ)投げ入れた。(しかし、)それでも御返事はなかった。その後、(宮は)色々な薄紙に様々に御心を砕いて、繰り返し繰り返し御手紙をひっきりなしに送ったけれども、流れ行く水に数を書くかのような(甲斐がない)感じで、一度も(姫君からの)御返事はなかった。宮は、「(思いがけない、人違いではないか)などとは)憎らしくも言ったものだよ。よしよし、それなら、それでよかろう。あれこれ言うような内に、母である女御殿の方へも、(このことが)聞こえたら、恥ずかしく思う」などとお思いになるけれども、(姫君のことが)忘れられず、お気持ち弱い「(決心がぐらつく)につけても、情の深さがあらわれて、ただ一筋に(姫君のことを)お思いになるのである。)

こうして日数も経つうちに、宮の邸の中が、静かで何につけしめじみとしている昼頃、常磐が、幼心に、宮が思い沈んでいらつしやるのを、気の毒に思い申し上げ、(宮の)間近くに参上して、「だんだんとそのようにしていればこの御事「(姫君に心を寄せること)」は気持ちが冷めてそれきり諦めることができなくなるのですか。(姫君の住まいは)いつもは行ってみると、しっかりと(侵入者を怪しんで)とがめようとする侍「(警護の武士)」などもおりま

せん。かえって御手紙などを書くようなことよりも、直接強引に（姫君の邸へ）お入りになられよ。しかも今夜は兵衛佐殿が、上皇の（もとでの）御宿直
 「Ⅱ邸に宿泊して警護する役」で、殿上にお仕えしているようです。（姫の住む邸には）誰の車ということもなく、たくさんの車が入りしておりますので、
 （それに）紛れなさって、車を中門にこっそりお止めになって、女房たちが、御邸の灯り（のこと）などで騒いでおりますようなことに紛れて、西の妻戸
 の方からこっそりお入りになって、灯火が白々となって（いる中で）、よくよく（姫君のお顔を）御覧になられまして、お心にかないなさいましたなら、
 目立たないようになさってでも（お部屋に）お入りなさいよ」（と勧める）。宮は、それもよからうとお思いになって、殿上人のふりをして、御自分の御邸
 をこっそりと出ていらつしやつたので、常磐は、（これに）お供申し上げた。

「解説」

問1 語句の解釈の問題。

(ア) 基本 「あはれ、／見／ばや」と単語分けされる。「あはれ」は、直後に読点がある場合は感動詞で、「ああ」と訳す。これだけで正解は③とわかる。
 また、文末にある「ばや」は、自己の願望の意を表す終助詞で、自分が「～したい」と訳す。①のように「～ればいいなあ」のようには訳さない。
 この点でも③が正解。

(イ) 基本 「なべてならぬ／匂／匂ひ」と単語分けされる。形容動詞「なべてなり」は「普通だ・並だ」の意だが、打消を伴っている「なべてならず」（こ
 こでは「ぬ」が打消の助動詞「ず」の連体形）の場合は、「並々ではない・格別である」という意味になる。これだけでも正解は①となる。なお、古
 文での「匂ひ」は、現在のように嗅覚に訴えかけるものだけでなく、見た目の美しさも含めて総合的な「美しさ」をいう言葉。その点では、単に「香
 り」と限定している③・⑤よりも、「色合いや香り」としている①・②や、「色合い」としている④のほうが正しいことになる。

(ウ) やや難 「いかにして／思し召し寄り／ける／ぞ」と単語分けされる。「いかにして」は厳密には「いかに／し／て」と単語分け出来るが、この
 「し」はサ変動詞「す」の連用形であるから、「いかにして」は「どのように／し／て」と直訳されることになる。この点で適当なのは②か④となる。
 「いかに」だけであれば、「なぜ」・「どのように」・「どれほど」と訳すが、「いかにして」では③のように「どれほど」と訳すことはできない。また、
 「いかにして」は「いかに」と同様に、願望や意志を表す表現と呼応している場合には「なんとかして／シタイ・どうにかして／シヨウ」と訳すこと
 があるが、問われている部分には願望や意志との呼応がないので、①「どうにかして」・⑤「何としても」と訳すこともできない。

②か④か、であるが、②は「いかにして」の訳は合っているが、「気のきいた趣向」に当たることがはつきりしない。花に手紙を結びつけて女に
 贈るといふのは古文の世界では当たり前に行われることで、兵衛佐が「気のきいた趣向」だと驚くようなことであるとは考えられないのである。よっ
 て、正解は④。ちなみに「思し召し寄る」は「思ひ寄る」の尊敬表現。「思し召す」が「思ふ」の尊敬語（最高敬語に相当する敬意の高い尊敬語）で

あるから、「思し召し寄る」は「思ひ寄る」の「思ひ」を「思し召し」に差し替えた語なのである。そもそも「思ふ」が「愛する・大切に思う」の意になることを確認しておきたい。現在でも「君のことをずっと思っていたんだ」とか「あの人は母親思いだ」などと言うことを考えればわかるだろう。本文のように恋愛に関わる文章や和歌で使われる「思ふ」は「愛する・大切に思う」の意になる可能性が高いのである。まして、「思ひ寄る」であれば「(異性に)心を寄せる」という意味であろう。つまり、傍線部の「思し召し寄りける」は、③「深く想いをお懸けになっていた」や④「好意をお持ちになるようになった」といった意味になる可能性が高いことを理解してほしい。よって、④が正解となる。

正解 (ア) 21 ③ (イ) 22 ① (ウ) 23 ④ (各5点)

問2 標準 敬語の種類と敬意の方向の判断の問題。

敬意の方向に関する問題は、二〇〇三年(二箇所)・二〇〇五年(四箇所)以来の出題である。

敬意の方向のまとめ

誰からの敬意であるか

イ 地の文の敬語の場合 ↓ 作者(筆者)からの敬意

ロ 会話文中の敬語の場合 ↓ その会話部分の話し手からの敬意

誰への(誰に対する)敬意であるか

ハ 問われている敬語が尊敬語である場合 ↓ その動作主体(主語)への敬意

ニ 問われている敬語が謙譲語である場合 ↓ その動作の受け手(動作を及ぼす相手)への敬意

問われている敬語が丁寧語である場合

↓ その丁寧語がある部分の聞き手への敬意

ホ 会話文にある丁寧語の場合 ↓ その会話部分の聞き手への敬意

ヘ 地の文にある丁寧語の場合 ↓ 読者への敬意

a 「候ふ」は、丁寧の補助動詞。「候ふ」は謙譲語として使われる場合もあるが、その場合は「お仕えする」の意を表す。ここ「参らす」を補助している。このように補助動詞として用いられている「候ふ」は丁寧語である。この点だけで正解は②・④に絞られる。ここは兵衛佐が兵部卿宮に対して話している会話文にあるので、右の「敬意の方向のまとめ」の口とホに該当し、この部分の話し手である兵衛佐から、会話文の聞き手である兵部卿宮への敬意を示していることになる。

b 「賜る(たまはる)」は、多くの場合に「いただく・お受けする」の意で使われる謙譲語。「給はる」とも書くが、「給ふ」と「る」に分けて考えず、「たまはる」で一語の謙譲語として扱うのが一般的である。ここは地の文で、宮の家来である常磐が、宮の「仰せ(御命令・御言葉)」を「お受けする」という意味であるから、「敬意の方向のまとめ」のイとニに該当し、作者から、「お受けする」という動作の相手である兵部卿宮への敬意を示していることになる。この点でも正しいのは、aで絞り込んだ②・④。aかbが確実に正解できれば、②と④に絞れるのである。

c 「御覧ず」は「御覧になる」の意の尊敬語(最高敬語に相当する敬意の高い尊敬語)。常磐が、兵部卿宮に対して話している会話文にあるので、「敬意の方向のまとめ」の口とハに該当し、この部分の話し手である常磐から、「御覧になる」という動作の主体である兵部卿宮への敬意を示していることになる。この会話文が、常磐が兵部卿宮に「直接姫君に会って姫君を御覧になるように」と勧めているものであることを読み取ることができれば、敬意の方向についても正解が得られるはずであるが、cが本文の末尾にあるので、ここまで読めるかどうかで正解を得られるかどうかを決定することになる。

以上のことから、正解は④となる。

正解 24 ④ (6点)

問3 やや難 和歌の表現技法と効果の説明問題。

和歌の内容を問う問題は、二〇〇三年・二〇〇四年・二〇〇六年・二〇〇七年など、近年も頻繁に出題されているが、和歌の修辞について問う問題は一九九二年・一九九八年(追試験では二〇〇六年にも少しだけ問われた)以来、久々の出題。全選択肢の内容を十分に納得して正解を出そうとする時間がかるかなかの難問であるが、まず、設問で「適当でないもの」と問うていることを見逃してはならない。

さて、正解となる③は、前半の「逢坂の関」に関する説明には誤りはないが、後半の「序詞」の説明が適当でない。「序詞」とはある言葉導くために直前に置かれる部分のことで、役割は「枕詞」と同じだが、「枕詞」がほぼ五音であるのに対して、「序詞」は七音以上の長さを持つことが特徴である。また、「序詞」は直後の言葉を導くためだけに使われるものであるから、和歌の後半で述べられる事柄とは関係がない内容になっていることが多い。有名な例をあげて説明すると、「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」では「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の」が序

詞であるが、後半にある「長々し夜をひとりかも寝む（長い夜をひとり寂しく寝るのだろうか）」が歌の主旨であり、「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の（山鳥の尾の垂れた尾のように）」は主旨には何ら関係なく、ただ「長々し」を導くただけに使われている部分なのである。しかし、Bの歌の「行き通ふ跡は知らねど」は、この部分を含めて歌全体を解釈してみても（かつて人々がその関を）行き通ったという跡は（実際には見たことがないので）知らないけれど、その逢坂の関を今こそ越えたい。」というように後半の内容と無関係とは言えず、また、この部分が直接「逢ふ」を導き出している役割を果たしているとも言えない。つまり、「行き通ふ跡は知らねど」を「逢ふ」の序詞であるとしている説明は正しくないなので、③が正解となるのである。

③以外の選択肢の説明が正しいことは、和歌の通釈を参考にして考えてもらえればわかると思うが、女性を花にたとえることがあること①、「うつろふ」に「移る」以外に「色あせる・色づく」などの意があること②、「ふみ」は「踏み」と「文」の掛詞になること④、「こそ」は強意の意を表す係助詞であること⑤などは、知っておくべき知識である。

正解 ③ (6点)

問4 標準 人物の心情説明の問題。

「この時の常磐の心情」は、傍線部Xの直前「常磐、幼き心地にねたくおぼえて申すやう、『当時、我が君の御文などをめざましくして、もてなし給ふ便なさまよ。取りだに入れさせ給へ』」に書かれているが、ここは「常磐が、幼心に（返事をしない姫君を）憎らしく感じて申すには、『ただいま、（こちらの女房たちは）我が君『兵部卿宮』の御手紙などを心外なものとして扱いなさるが、それはよくないことだぞ。せめて（宮の御手紙を）取り入れるだけでも取り入れて下さい』と訳す部分である。「ねたし」（憎らしい・いまましい）・「おぼゆ」（感じる）・「めざまし」（気に入らない・素晴らしい）・「もてなす」（扱う）・「便なし」（不都合だ・よくない）などは、知っていなければならぬ重要単語である。よって、これを踏まえている②が正解となる。「兵衛佐の妹と女房たちが受け取ろうとせず、主人に対し失礼な扱いをする」は、Cの和歌の前に書かれている「女房たちは、『いかに。思ひ寄らず。人違へか。とくとく帰り給へ』と、取り入れず。」等を指しているのである。

①の「わずらわしく」、③の「激しい嫉妬」、④の「自己」の立場が悪くなるのではと案じ、⑤の「不憫」は、いずれも本文内にそのように読み取れる根拠となる表現がない。

正解 ② (7点)

問5 標準 人物の心情の推移の説明問題。

正解となる①の前半「最初はお気に入りの兵衛佐の妹なら美しいだろうから会ってみたいと執心していた」は、本文第一段落の「院にもこの兵衛佐はあはれ、見ばや」に相当し、「お気に入りに」については第一段落末尾「この兵衛佐をも、常は御目をも掛けさせ給ひてあはれみ給ひける」からもうかがえる。また、①の中ほど「何度も贈った和歌をはねつけられて落胆した」は、Bの和歌の二行後「女房たちは」以降、その段落の末尾「忘れず、御心弱きにつけても、情けのほどあらはれて、ただ一筋に思すなり」までに書かれていることに相当し、「落胆」については「ねたくも言ひけるものかな」「恥づかしく思へ」などにあらわれている。さらに、①の後半「常磐に兵衛佐の邸に忍び込むように進言されて再び希望を見出した」は、本文最終段落に書かれていることに相当し、「希望を見出した」は「さもあるべし」と思つて出かける兵部卿宮の様子からうかがうことができる。

②は「遊び心」がそうであると断言できる表現になつておらず、「やりとりをする」が本文にない。③は「兵衛佐の熱意におされて気乗りのしないうまま」「兵衛佐が妹に詠ませた和歌に心が動いた」が本文にない。④は「垣間見して」が本文になく、「立腹」「恨み言を直接兵衛佐の妹に言うため」もそうであると断言できる事柄ではない。⑤は「同情して世話をしたい」「意地悪な返事をもらい」が本文にない。

正解 27 ① (8点)

問6 標準 内容合致問題。

①は「父式部卿宮」が誤り。本文四行目「式部卿宮の腹にて候ふ」(注4も参照せよ)によれば、「式部卿宮」は、兵衛佐や姫君の生母の父、つまり、祖父である。兵衛佐や姫君の父は本文二行目にあるように「右大臣」である。

②は「兵部卿宮に気を遣つて妹に取り次ごうとした」が誤り。Bの和歌に対して姫君の女房たちは「いかに。思ひ寄らず。人違へか。とくとく帰り給へ(なんと。思いも寄らない。人違いか。さつさとお帰り下さい)」と言つて、宮の手紙を取り入れないのである。

③は全体的に誤り。これに相当すると思われる「とかく言はんほどに、母女御殿の御方へも、聞こえんこそ、恥づかしく思へ」(Cの和歌の五行後)は「兵部卿宮があれこれ言うよううちに、母である女御殿の方へも、(このことが)聞こえたら、恥づかしく思へ」という意味である。

④は「早くに亡くなつた妻の形見として」が誤り、第一段落冒頭の兵衛佐の説明によれば、兵部卿宮が献上させた菊は、兵衛佐の父である右大臣殿が鞍馬の僧坊にあつたものを家に移し植え、父の死後に兵衛佐の妹君が父の形見として見ようとしてそのままにしておいたものである。

①から④に誤りがあるので正解は⑤ということになるが、⑤の内容は本文の傍線部ウの直後に書かれている「もとより、これこそ、あらまほしきことにてあれ。御返事すすめ給へ。女房たち」に相当する。⑤にある「一家を榮えさせる好機と思ひ」は明確に書かれているわけではないが、兵衛佐は「父母が元気であれば妹は皇后になつていてもおかしくはないのだ」と言いつつ兵部卿宮(今上天皇の弟であると第一段落末尾に書かれてい

る)との交際を勧めているのである。天皇に娘を嫁がせて外戚となって栄えた平安中期の藤原兼家・道長などのことを踏まえて考えれば、兵衛佐がこの機会を「一家を栄えさせる好機」と考えていると言ふことはできるだろう。この点で⑤を正解にしてよいかどうか悩んだ受験生もいるかも知れないが、①～④のキズ(誤り)がはっきりしているので、キズが浅い⑤を正解とすべきである。

国語の問題では、どのような設問であっても、あくまでも本文表現に即して正解を導き出さなくてはならないが、まして合致問題ではなおさらである。本文表現と照合できない部分をチェックしてはじめていけば、正解はおのずと絞られてくることになる。

正解

28

⑤

(8点)

第4問 漢文

侯方域「壯悔堂文集」

「書き下し文」

西施能く呉を亡ぼすに非ざるなり。而るに後世亡国の罪を以て之を西施に帰するは、過てり。

使し呉王宰嚭を信じて伍胥を殺さず、内は国政を修め、外は敵人に備へば、西施は二嬪嬙のみなれば、何をか能く為さん。当時句踐の堅忍、種・蠡の陰計を以て、臥薪嘗胆し、日に其の後を伺ふ。而るに乃ち遠く数千里に出で、長を黄池の間に争ひ、鬯を艾陵の上に構へ、師を窮め武を黷し、殆ど寧歳無し。越人其の空虚に乗じて、其の巢穴を傾く。此れ即ち西施無くとも、豈に亡びざる者有らんや。

吾呉の亡ぶるを観るや、秦の苻堅と相ひ類す。二君の荒淫と精明とは、固より年を同じくして語るべからず。而れども秦の亡ぶるは晋を伐ち潰ゆるを致すを以てし、呉の亡ぶるは境を越えて内救及ばざるを以てす。其の轍は一なり。然る後に「佳兵は自ら焚き」て「遠きを攻むる者は近きを遺る」、元龜・格言の必ず易ふべからざるを知るなり。

「通釈」

西施が呉の国を滅ぼすことができたわけではない。にもかかわらず、のちの時代の人々が、呉の国が滅んだのを西施のせいにするのは、間違っている。

もし呉王が宰相の伯嚭の忠告を信じて（忠臣の）伍子胥を殺したりすることなく、内に対しては国政につとめ、外に対しては敵兵にしっかり備えていたら、西施はただの宮女にすぎないのだから、何ができたであろうか（何もできはしなかったであろう）。そのころ（越の国では）越王句踐の堅い忍耐と、文種・范蠡の（呉を伐つための）ひそかな計略によって、仇をはらそうと苦心・苦勞を重ね、日々後日の復讐の機会をうかがっていたのである。それなのに（呉王は）数千里もの遠征をして、黄池で他国の諸侯と覇者の座を争い、艾陵で戦争を始め、軍隊を頻繁に出動させ、兵力を濫用して、平和で戦争のない期間ほとんど無かった。（そのため）越の兵が（出兵して）国内（の防備）が手薄になっているのに乗じて（攻め入り）、呉の国を傾けたのであった。これでは、たとえ西施がいなかったとしても、（呉は）滅亡していたであろう。

私が呉の滅亡について思うには、（五胡十六国の時代の）前秦の苻堅と（呉王夫差とは）互いに似ている。（この）二人の王の酒色への耽溺と聡明さ（といった資質について）は、もちろん同一に語ることはできない。しかし、前秦が滅びたのは、東晋を征伐しようとして大敗を喫したためであり、呉が滅びたのは、遠征の軍を出して国内の危急を救うことができなかつたためである。その（二人の）歩んだ道（の結末）はまったく同じであった。これらを見ると、「優れた兵器は自らを焼く」「遠くを攻める者は近く（の患）を忘れる」といった、古くからの教訓や格言が、決して変わらないものであることがわかるのである。

〔解説〕

問1 基本 語句の意味の問題。

問1は、二〇〇四年度から五年間漢字の読み方の問題が続いていたが、今年度は語句の意味の問題になった。語句の意味の問題は、近くは二〇〇五年度など、かつてはよく出ていた形である。今後、漢字の読み方の問題がしばらくかけをひそめるならば、語句の意味の問題や、漢字の用法と熟語の問題の出題などに注意したい。

(1) 「寧歳」の「寧」は「安寧あんねい（世の中が穏やかで平和なこと）」の意。(2) 「平和で戦争のない期間」が最も適当である。呉王が「遠く数千里に出で」て、「師を窮め武を黷けがし（注9＝軍隊を頻繁に出動させ、兵力を濫用）」していたのであるから、その状況にもあてはまる。①は「治安」はともかく「改善」がキズである。③「健康」・④「気候」はまったく関係ない。⑤は一見文脈にあてはまりそうだが、「兵役が免除された世代」が無いとなると、〇代・十代や、六十代・七十代もそうなのか、という話になってしまう。

(2) 「相類」は「相ひ類」しているのだから「似ている」のである。比べられている呉王と苻堅は、一方は春秋時代（紀元前8～5世紀）、もう一方は五胡十六国の時代（三〇四～四三九年）の人物であるから、①「ともに協力し合う」はありえない。④の「意見」は何の意見を言うのかが、文中からわからない。⑤の「欠点がある」は、たしかに「ある」だろうが、「類す」という語の意味からかけはなれすぎている。②か③か、であるが、②は「すべてに」が間違い。直後に「二君の荒淫と精明とは、固より年を同じくして語るべからず」とあるので、二人は「似ている」が、「すべてに共通」しているのではない。

正解 (1) 29 (2) 30 (3) (各4点)

問2 標準 傍線部の書き下し文と解釈の組合せの問題。

例年よく出ていた、返り点の付け方と書き下し文の組合せの形でなく、今回は書き下し文と解釈の組合せの形になった。これも、かつてから時々あった形の出題である。(i)の書き下し文と、(ii)の解釈は、単独で正否を考えることもできるが、当然合致しなければならぬのだから、それをチェックすることで、スピーディーに答を絞ることができる。

まず、(i)の選択肢の冒頭に、①・⑤は「しか而るに」、②・③は「しか而して」、④は「しか而れども」と、2対2対1の配分がある。「而るに」と「而れども」は逆接、「而して」は順接である。(ii)の選択肢の冒頭は、①「ととはいえ」、④「にもかかわらず」、⑤「しかしながら」が逆接、②「だからこそ」、③「そののち」は順接である。

傍線部直前の「西施能く呉を亡ぼすに非ざるなり」と、傍線部の後の第二段落全体の論旨を考えると、「而」は逆接でなくてはならない。筆者は、

西施が呉を滅ぼしたわけではないと言っており、それに対して「後世」が西施が呉を滅ぼしたと言っている、それは「過（＝まちがい）」だと第二段落全体で論じているのである。

逆接になっているのは、(i)の①・④・⑤、(ii)も①・④・⑤である。

(i)の①は「それなのに、後の世の人が呉の亡国の罪を西施に負わせるのはまちがっている」となり、(ii)の④と合致する。

(i)の④は「しかし、後の世の人が呉の亡国の罪で、この西施を帰すのはまちがいである」となり、(ii)の①に近いが合致せず、また、(ii)の①の意味では文脈にあてはまらない。

(i)の⑤は「それなのに、後の世の人が呉の亡国の罪で西施に帰るのは行きすぎである」となり、何を言っているのか意味が不明である。

正解 (i) 31 ① (ii) 32 ④ (各5点)

問3 基本 傍線部の主語（行為の主体）の判断の問題。

主語の組合せの問題は、二〇〇一年度以来久々の出題である。

(ア)「何能為（何をか能く為さん）」は反語形で、「何をできるだろうか、いや何もできない」という意味である。この二重傍線部(ア)を含んだ一文は「使し呉王…」から始まっているが、主語が「呉王」である述部は「敵人に備へば」までで、そこで主語は「西施は」と転換している。呉王の心を奪うために送り込まれたとはいえ、呉王がもししっかりとしていれば、何もできなかったであろうのは「西施」である。(ア)の段階で、答は③・⑤に絞られる。

(イ)「日伺其後（日に其の後を伺ふ）」の主体は、直前の「臥薪嘗胆」の主体でもある。「臥薪嘗胆」はよくテキストにもあり、学習した経験のある人が多いと思われるが、「仇をはらそうと、長い間苦心・苦勞を重ね、辛苦を耐え忍ぶこと」をいう。では、その主体は誰かであるが、臣下であった「種・蠱」もともにそうであったとはいえず、中心とすべきは当然越王である。「句踐」である。「臥薪嘗胆」が越の側のことである知識があった人は判断が早かったであろう。2対1対1対1という選択肢の配分から見ても、2の「句踐」が○のように見える。ここで、正解は③と出る。

(ウ)「遠出数千里（遠く数千里に出で）」の主体は、「長く黄池の間に争ひ、鬘を艾陵の上に構へ、師を窮め武を黷し」て「越人」に攻め込まれて国を滅ぼしてしまった人物であるから、これは「呉王」でよい。少なくともここでは「西施」はまったく関係ないし、「句踐」では立場が逆である。

正解 33 ③ (6点)

問4 標準 文の表現と内容の特徴を判断する問題。

「文の表現と内容の特徴」を問うという形は、現代文や古文では既出であるが、漢文では珍しく、新傾向と言えよう。ただ、実際には、表現のポイントになっている重要句法と、Ⅰ～Ⅴの各文と選択肢との内容合致の問題であると言つてよい。

①ⅡⅠは、「使し」があるので「仮定の問いかけ」は合っているが、「呉の滅亡は呉王にこそ求めるべきである」という従来の見解」が間違い。
 ②ⅡⅡは、「越の軍隊を攻撃するために、呉がひそかに力を蓄えていた」が間違い。「越」と「呉」が逆である。
 ③ⅢⅢは、「呉と越との戦いを具体的に列挙」以降、全面的に間違い。呉と越が長年戦っていたことは事実であるが、この文の中では呉と越の争いのことは述べてはいない。

④ⅣⅣは、「巢穴」を「小動物を捕らえるように容易であった」ことを示すための喩えとしている点で間違い。

⑤ⅤⅤが正解。「即たとひ西施無くとも」が仮定形、「豈に亡びざる者有らんや」が反語形であり、「呉の滅亡に対する従来の見解を否定し、筆者自身の意見を強く主張している」も正しい。

正解 34 ⑤ (8点)

問5 標準 傍線部についての内容説明の問題。

まず、選択肢前半の2対2対1の配分に着眼したい。

①・④は「呉王と苻堅とは個人の資質もその結末も全く同じであった」。

②・⑤は「呉王と苻堅とに個人の資質の上では違いがあっても、二人の結末は全く同じであった」。

③だけが、「呉王と苻堅とはその結末に違いがあっても、個人の資質は全く同じであった」。

第三段落を見てみると、呉王と苻堅とは「相ひ類す(Ⅱ互いに似ている)」とある。しかし、この二人の「荒淫と精明とは、固より年を同じくして語るべからず」だと言っている。ここは選択肢でいえば「個人の資質」についてのことを言っている部分というべきであろうが、当然のことながら、「個人の資質」は同じではないのである。ゆえに、「個人の資質」を「全く同じ」としている、①・③・④は間違いと言える。

「結末は全く同じ」については、傍線部Bの「其の轍は一なり」そのものが述べていることでもある。

②は、「いずれも優れた人物を殺害して」が、苻堅にあてはまらないし、嚴密には呉王の場合も伍子胥の死は自殺である。

正解 35 ⑤ (8点)

問6 やや難 古言・ことわざの引用の意図の説明問題。

目先を変えた質問のしかたをしているが、問5とも関連して、本文全体の趣旨を問う内容合致問題である。

①は「呉王と苻堅との比較」によって「呉国の滅亡は、呉王の為政者としての資質にその原因があった」ことの論証をしようとしている点と、二つの教訓・格言の言おうとしている内容ともそぐわない。

②は「呉国の滅亡」が「越王とその臣下らの巧みな策略によるものである」ことを証明しようとしている点と、二つの教訓・格言の内容とそぐわない。

③は「為政者として強大な軍隊を統御し続ける」ことについては、本文では全く述べていないし、それが「常に困難を極める」のはそのとおりではあるが、それも本文の内容には関係なく、「遠きを攻むる者は近きを遺る」の格言をカバーしていない。

④が正解。「軍事力を安易に行使すると必ず自滅を招く」は、呉王にも苻堅にもあてはまり、二つの教訓・格言の趣旨とも合致する。「いつの時代にも繰り返されている」も、「必ず易ふべからざる」と合致している。

⑤は、呉の滅亡を「容易には理解できない深遠な理由に基づく」として、理由を明示していない点、筆者の主張と異なっている。

正解 ④ (10点)

36

④

(10点)